第 23 章
歴史的な人物

朝倉文夫（あさくらふみお）

明治16（1883）−昭和39（1964）年

彫塑家

旧上井田村（朝地町）に渡辺要蔵の三男として生まれ。10 歳の時、養子として朝倉家を継ぎ、19 歳で上京。東京美術学校彫刻選科を卒業後、卓越した描写力で「自然主義的写実主義」といわれる作風を確立しました。大正 8（1919）年に帝展審査員になったのを皮切りに、同 10（1921）年に東京美術学校教授、同 13（1924）年に帝国美術院会員となり、昭和 23（1948）年には文化勲章を受賞しました。代表作に「墓守」などがあり、肖像作品を多く手がけました。舞台芸術家で画家の朝倉摂（本名･摂子）は長女、彫刻家の朝倉響子は次女。

（大分県歴史人物事典・朝地町史）

麻生豊太郎（あそうとよたろう）

万延元（1860）〜昭和15（1940）年

蚕種技術者

緒方町井上で生まれ、養蚕業の先駆者で、緑肥栽培法や水稲の品種改良で農業経営の安定化に尽力しました。

（大分県歴史人物事典）

安藤喜一郎（あんどうきいちろう）

安政6（1859）−昭和14（1939）年

実業家

大野郡夏足村（大野町）で生まれ、醸造業や銀行経営などを手がけ、実業界の重鎮的存在でした。田中村会議員や郡会議員、県会議員もつとめました。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

安東寿郎（あんどうとしろう）

明治12（1879）−昭和32（1957）年

数学者で日本の算数理科教育の先覚者

緒方町木野で生まれ、竹田高等小学校では滝廉太郎と同期。東京高等師範学校の教授を勤め、算数や理科教育の普及に努めました。

（大分県歴史人物事典）

安東誠（あんどうまこと）

明治6（1873）−昭和32（1957）年

蚕種技術者

豊後高田市の生まれで、井田村（現千歳町）の豊国製糸の支配人として移住。養蚕技術の向上に尽くし、井田村長（現千歳町）もつとめました。

（大分県歴史人物事典・千歳村誌）

生島敏士（いくしまびんし）

明治18（1885）−昭和32（1957）年

花火師

大分市の増田現一煙火製造所で修行の後、大正 6（1917）年犬飼町に工場を建築し移住。研究と実験を重ねて独特の花火を考案し、豊後花火の基礎を築くなど名声を博しました。

（大分県歴史人物事典・犬飼町誌）

石野玉儁（いしのぎょくせん）

明治16（1883）−昭和24（1949）年

画家

福岡県戸畑村の生まれ。東京美術学校に入学後、東京などで教員を経て、大野町で金光教の布教活動のかたわら画業に取組み、独自の画風の南画作品を描きました。

（孤高の絵旅人石野玉儁）

一万田鑑実（いちまだあきざね）

生没年不詳

戦国〜安土桃山時代の武将

豊後国守護の大友能直の六男であった時景を祖とする一万田氏は、大野郡大野郷上村（朝地町）の地頭に任じられた有力な大友家臣です。一万田鑑実は大友 21 代義鎮（宗麟）の頃九州各地の遠征に参加して多くの戦功を挙げています。天正 15（1587）年の豊薩戦争において息子の鎮実と共に薩摩の島津氏と戦いましたが、一族の謀反による責任を負って自刃したと伝えられています。朝地町池田に館跡があり、詰城としての鳥屋城や出城としての小牟礼城などを構えていたことと推定されています。

（朝地町史）

市万田虎人（いちまだとらと）

慶応2（1866）−大正13（1924）年

医師

佐草村（清川町三玉）の岡藩医師の家の生まれ。家業を行ないながら、牧口村（現清川町）の村長として村政や農業界・教育界の振興にも努めました。

（大分県歴史人物事典・清川村誌）

伊東東（いとうあずま）

明治19（1886）−昭和34（1959）年

郷土史家

三重町秋葉で酒造業をしながら郷土誌の研究を行ない、柳田国男や小川琢治ら中央の学者と接触し、文献研究と実地調査で歴史研究者としての地位を確立。また終戦時の三重町長も務めています。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

伊東研蔵（いとうけんぞう）

天保11（1840）−大正9（1920）年

井路開削の技術者

緒方町上畑の庄屋に生まれ、生涯で５つの井路開削の実測・設計に従事しています。また林業の振興や上畑小学校の開設にも貢献しています。

（大分県歴史人物事典）

宇野十平（うのじゅうへい）

弘化3（1846）−明治37（1904）年

農事殖産家

竹田市で生まれ、清川町宇田枝に移住し、農事殖産経営にあたりました。養蚕指導や畜産業・製糖業などにも携わっています。

（大分県歴史人物事典・清川村誌）

衛藤官（えとうつかさ）

明治26（1893）−昭和50（1975）年

建築家

牧口村大字天神（現緒方町）の生まれで、大阪の辰野工学博士経営の建築事務所に入社し、多くの建築物の監督または主任として携わっています。帰郷後も設計監督事務所を開設し、当時の県下の代表建築物の設計を行なっています。（大分県歴史人物事典）

衛藤安馬（えとうやすま）

明治6（1873）−昭和18（1943）年

教育・社会実業家

大野郡内尋常高等小学校長を歴任し、信用購買販売組合や農事実行小組合の設立、合川水力電気株式会社の設立に尽力しています。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

大野基尚（おおのもとひさ）

明治17（1884）−昭和45（1970）年

ブラジル移民指導者、大野町長

片島村（大野町）で生まれ、東京外国語学校スペイン語科で学ぶ。卒業後、ブラジルへの第１回移民の監督としてブラジルへ渡り、現地で移民たちの世話をしながら栽培技術指導等を行っています。帰郷後、昭和 23（1948）年大野町長に就任。植林や土壌改良など農林業の発展に尽力しました。

（大分県歴史人物事典）

大野泰基（おおのやすもと）

生没年不詳

平安末〜鎌倉初期の武将

豊後武士団大神一族の大野氏出身。鎌倉幕府に領国を没収された大神一族を率いて対抗しますが、神角寺の合戦で敗れて自害したと伝えられています。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

緒方惟栄（おがたこれよし）

生没年不詳

平安末〜鎌倉初期の武将

豊後武士団大神一族の武将で、緒方を拠点としたため緒方氏を名乗りました。源義経に協力して九州における反平家の中心人物として活躍し、一族を率いて平家追討に大きな功績をたてました。その後義経との接近により源頼朝より捕えられ、沼田荘（群馬県）に配流となります。のちに許されたが帰国途中で病死したともいわれています。　（大分県歴史人物事典）

岡本一策（おかもといっさく）

明治22（1889）−昭和21（1946）年

外交官

三重村（三重町）生まれ。三重高等小学校卒業後、上京し私立中学で学びます。英会話は抜群で外務省

に勤務し、中国・アメリカ・シンガポール等の領事となります。昭和 15（1940）年に辞職し、上海工部局に転職。大戦末期に帰国し、外交国策に関与しました。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

小野武夫（おのたけお）

明治16（1883）−昭和24（1949）年

農学者

川辺村（三重町）生まれで、篤農家であった祖父の影響を多大に受けます。県立農学校卒業、上京し、農商務省に勤務。職を転々とする間、農民経済史の研究を続け農学博士を授与されます。帝国農会の委嘱を受け、永年小作慣行の調査を行い「永小作論」を発表。農民経済史の他、百姓一揆の研究も行い、一生を農村研究にささげました。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）

葛城一（かつらぎはじめ）

明治13（1880）−昭和50（1975）年

医師

大分市で生まれ、千歳村の葛城家に養子に迎えられます。陸軍軍医部に入り、その後眼科の最新技術を学び、新殿（千歳町）で医業を継ぎます。特に眼科の名医として名高く、約 20 年間学校医を勤めました。また、村会議員などもつとめ、社会福祉活動にも尽力しています。

（大分県歴史人物事典・千歳村誌）

門石長秋（かどいしおさあき）

明治10（1877）−大正15（1926）年

歯科医師

宇田枝村（清川町）で生まれ、上京して歯科医学院卒業後、歯科医術開業試験に合格。長野県上田市で開業していましたが明治 41（1908）年に再び上京し、神田で開業、日本歯科医師会副会長の要職に就きます。大正初期に私財を投じて東京歯科医学講習所を開設。郷土出身の受講者も多く指導し、歯科医師の養成に尽力しました。大正 12（1923）年の関東大震災に被災後、病を得て再起できないまま亡くなりました。

（大分県歴史人物事典・清川村誌）

加藤長古（かとうながふる）

元文4（1739）−文化11（1814）年

江戸時代の御嶽神社（清川町）の神主

15 世紀半ばの神社創建と同じ頃に始まったと伝わる御嶽神楽に、演目などを創始・追加し今日の神楽として完成させたといわれています。

（清川村誌・悠久に舞継ぐ御嶽神楽）

清原無暦（きよはらむれき）

天保元（1830）−明治37（1904）年

書家、勤王家

日出村（日出町）の光蓮寺に生まれ、無暦は号、名は宣道。20 歳のときに田中村（大野町）の法盛寺の第 16 世住職となり、近隣で宗学を教えるなどしています。教部省に勤めるなどいくつかの職を歴任し、官界を退いた後は、書画に専念し、各地を巡遊して画作につとめました。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

吉良元夫（きらもとお）

慶応3（1867）−昭和13（1938）年

政治家

上井田村上尾塚（朝地町）に生まれ、家業の酒造に従事しながら村会議員や村長を勤めました。衆院議員に立候補し当選、運輸通信に力を入れ、朝地駅の開通に尽力しています。

（大分県歴史人物事典・朝地町史）

国見岩（くにみいわ）

寛政年間（179?）−弘化3（1846）年

力士

江戸時代の力士。名を衛藤文五郎といい、宇田枝（清川町）の生まれ。岡藩お抱えの力士として随一の強さを誇ったといわれています。宇田枝に古荘梅谷の揮毫といわれる墓碑があります。　（清川村誌）

久保寿獲（くぼじゅかく）

明治12（1879）−昭和28（1953）年

医師

徳田村（緒方町）に生まれ、日露戦争に軍医として出征した後、郷里で開業します。以来村医や学校医として地域医療に尽くす一方、県会議員にも選ばれ、教育や農業の振興に努めました。

（大分県歴史人物事典）

小玉治行（こだまはるゆき）

明治33（1900）－昭和47（1972）年

判事

犬飼町石井に生まれ、大正 13（1924）年に中央大学法学科を首席で卒業後、裁判所判事として各地を転任し、昭和 22（1947）年大審院判事となり勅任官となります。退官後、衆院議員に当選し、自由民主党の法律関係に尽力しました。

（大分県歴史人物事典・犬飼町誌）

後藤郷兵衛（ごとうごうべえ）

宝暦13（1763）－天保11（1840）年

江戸時代後期の石工

柴北（犬飼町）に生まれ。農業のかたわら石工として活躍し、特に石造彫刻の繊細な技巧は藩内に名声を博しました。岡城の改修や道路・橋梁の多くに参画し、架橋技術は肥後（熊本県）より学んだと伝えられています。息子も二代目郷兵衛として活躍しています。

（犬飼町誌・大分の石拱橋）

後藤鹿太郎（ごとうしかたろう）

天保8（1837）－大正5（1916）年

富士緒井路の企画立案者

軸丸村（緒方町）生まれ、農民の強訴運動や干ばつを見て、井路開削の決意を固め、考案した独特の測量法で水源地の探査を始めます。数年かけて水源を発見し、小富士村に井路開削計画を提出。23 年後の 77 歳のとき大正 3（1914）年に井路通水しました。

（大分県歴史人物事典）

後藤静香（ごとうせいこう）

明治17（1884）－昭和44（1969）年

社会教育家・社会運動家

中井田村（大野町）で生まれ、師範学校卒業後、長崎県の女学校に勤務のかたわら、修養教化運動に参加。女子育英事業、難民救済、アイヌ救済、ハンセン病患者救済、盲人教育などの活動をし、修養団体「心の家」を設立し、生涯を社会教育に捧げました。雑誌『希望』を発刊、著書に『権威』などがあります。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

後藤基範（ごとうもとのり）

天保13（1842）－大正5（1916）年

養蚕普及の先駆者

夏足村（大野町）に生まれ、養蚕先進地の長野県などで養蚕を学び、研究結果を基にして、養蚕教師として各地を巡回指導など養蚕の普及に努めました。

（大分県歴史人物事典・大野町史）

佐藤徳馬（さとうとくま）

慶応3(1867)－昭和19(1944)年

豊後製糸創設者、明正井路理事長

城原村（竹田市）に生まれ、南緒方村（緒方町）に養子となり、緒方郷の養蚕業の普及にあたりました。牧口村（清川町）に豊後製糸会社を設立し取締役となります。明正耕地整理組合の組合長として技師の矢島義一とともに井路建設に着手し、大正 13（1924）年に完成させました。

（大分県歴史人物事典）

志賀親善（しがちかよし）

永禄11（1568）－没年不詳

戦国時代の武将

豊後国守護の大友能直の八男であった能郷を祖とする志賀氏は、大野郡大野郷志賀村（朝地町）の地頭に任じられた有力な大友家臣です。その子孫の志賀親善は天正 14 年（1586）の島津義弘との合戦で岡城で抗戦して守り抜き、翌 15（1587）年には激戦の末一万田・柏野・小牧などの大野・緒方地域の諸城を奪還し、退却する島津軍を追撃するなどの活躍で豊臣秀吉より功をたたえられました。

（大分県歴史人物事典・大分歴史事典）

重光葵（しげみつまもる）

明治20（1887）－昭和32（1957）年

外交官 政治家

父直愿が大野郡長として赴任していた三重町市場で生まれます。東京大学卒業後、外務省に勤務し、昭和 18（1943）年東条内閣で外務大臣。昭和 20（1945）年ポツダム宣言受諾後の終戦処理内閣の外務大臣となり、降伏文書に調印しました。A 級戦犯となり、刑期を終えた後、政界入りし改進党総裁となります。昭和 29（1954）年結成の民主党で副総裁となり、鳩山一郎内閣で副総理兼外相を務めました。

（大分県歴史人物事典・三重町誌）